

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭 故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府の發展性……………文學博士 矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

記事

財部教授逝く
故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戸 正雄 本庄榮治郎 蜷川 虎三
木村喜一郎 吳文炳 宗藤 圭三
青盛 和雄 松岡孝兒 石川 興二
黒正 巖 藤本幸太郎 谷口 吉彦
岡崎 文規

附錄

彙報

外國雜誌論題

計學研究のため、英・獨兩國に留學を命ぜられたのは明治四十三年の秋で財部君もその頃獨逸に來られた。

明治四十五年(大正元年)夏學期の頃だつたと記憶するミューンヘン(民顯)大學で、一つ机にマイヤー先生(M. v. Meyer)の理論統計學の講義を聞いた。君は當時既に統計學では既に一家をなしてゐたのであるから、自分などとは異り先生の講義を批判的態度で臨んでゐた。

ある日の聽講後、自分に「マイヤー先生の統計學はいつ迄その生命が続くだらうか」との鋭い批評の言葉があつた。その頃は社會統計學に對する學界の態度は漸く變りつつあつたのであるからでもあるが、まだまだマイヤー教授の統計學界における勢力は隆々たるものがあつて、獨逸では教授の門下生が到る所牛耳をとつてゐた時分である。この秋に當つて斯くも鋭き批評を加へ得るものは内外多くはなかつたであらう。尤も英米・佛等獨逸以外に於ける統計學界の趨勢は國勢學派の流を汲める社會統計學とは可なり異つてゐて、統計方法論殊に數理統計學派の擡頭しつつあつた時代であ

財部博士の思出

藤本幸太郎

財部博士と自分との交際は獨逸留學の當時からであるから最早や三十年の昔になつた。自分は商業學、統

るから早くも財部君によつてかやうな批判の言葉となつたものであらう。マイヤー教授逝いて後の獨逸統計學會の大勢は寧ろ數理的・方法的傾向が目覺しい前進をなしてゐる。

當時民顯には文部省留學生の數も自分等數名に過ぎなかつたし、君と自分とはその攻むる學問も同じであつたから、君とは殊に親しく學問上の話をする機會が多かつた。後には一週二回、一度は君の宅で、又一度は自分の下宿で獨逸書の輪講を試みるやうになつた。

しかし何時も自分が君に與ふるものは鮮く、君から受くる方が遙かに多かつた。君はジョン、スチユアルト、ミルのやうに學問に對して極めて精密な檢討をする學者として良い習慣を持つてゐた。自分はミュンヘン大學では主としてマイヤー先生の指導を受け、そのゼミナルにも加はつた。それが縁となつて民顯市から程遠からぬステルンベルガー湖畔の先生の別荘に數回の招待を受けて家庭における麗はしい學者的生活をも知る機會を持つたが、君も特に先生の講義を聽かんとして

態々斯地に來られたのであるから先生との交渉は又多かつたことと思はれる。自分はその秋君と袂を分つて獨逸から英國に渡つたからそれからの君の消息は餘り覺えてゐない。

歸朝後君は京都帝大經濟學部に奉職して専ら統計學の講義と研究とに没頭せられて多くの英才を其の門下から輩出せしめた。大正八年頃から内閣統計局で行はれた統計學の夏期講習會に講師として上京して人口統計論の講義を擔當せられ、自分は經濟統計の講義を擔當した。その後は中央統計委員會で高野・山崎・鹽澤等の先輩と一所に會する位の程度で、數々御目にかかることがなかつた。殊に最近兩三年君は病痾のため出京も出來なかつたものの如く面晤の機會を逸してゐる中に、終に幽明境を異にするやうになつて了つた。悲しいかな。度んで君の冥福をいのる。

(昭和十五・七・一七 於山中湖畔山莊)